ヒルバーン先生の大きな足跡

——先生の退職，帰国に際して——

大 道 安 次 郎

社会学部教授ヒルバーン先生は，今春退職されて，アメリカに帰国されることになった。戦前から永らく親しくして頂いている私としては，とくに感慨深いものがある。

先生が学院においでになったのは，1930年（昭和5年）のことである。当時の学院は専門学校であって，まだ大学ではなかった。しかし大学開設を間近かにひかえて，教授陣容の整備・補強が必要であった。そのために先生をお迎えしたわけである。先生はすでにその時シカゴ大学の Ph. D. の学位をもっていた。そんなわけで学院にこられたわけであるが，はじめは専門部文学部の英文学の教授として来任されたのである。先生がミッショナリーとして来日されたのはそれより早く1923年で，学院にこられるまえにすでに，広島や尾道方面で在日宣教師として活躍されていた。

先生が学院にこられたとき，私もまた時を同じゅうして学院高商部に奉職した。学部は異るが，同じ学院にいわば同期生として奉職したわけである。

その後，先生は大学開設とともに法文学部の教授となり，宗教学，インド哲学などを講義された。当時としては，日本ではまだ正統なアメリカ的な学問が紹介されていなかったなかで，いちはやく本格的なアメリカ流の学問を学院教育のなかに移され，新風を吹きこまれたのであった。

ところが不幸にして，太平洋戦争に突入したために止むなく帰国されたが，1953年再び来日された。在米中はコロラド大学東洋語講師・副主任をされたり，ダコダ・ウェズリアン大学学長もされた。この栄職を投げ棄てて来日されたのである。戦前のミッショナリーの多くが戦後再び来日されている。戦後のまもない日本の状態は，その日の糧にも欠けた窮乏の日々であった。その日本に身を挺して来日されたミッショナリーの崇高な使命感に深く心が打たれた。先生もその一人であった。来日後しばらくは東京の青山学院大学や東京神学大学の教授をされていたが，私たちの切望をいれられて，1956年（昭和31年）再び関西学院大学文学部社会学科の教授として来任され，社会史の講義を担当し，さらに社会学部が独立学部として出発すると同時に，社会学部教授として，社会史の講義を大学院中心に担当し，現在にいたっている。

このように先生は学院と関係が深く，また永い。とくに社会学部との関係は密なものがある。社会学部教授会が全員一致して先生に名誉教授の学位記を贈呈することを大学当局に推薦したことは当然なこ

とであるといえよう。

先生はミッショナリーとして来日されているが，本格的な学者でもあった。アメリカの人類学，宗教学の講義を通して学生に多くの影響を与えているが，現在その方面で第一線の活躍をしている大阪学芸大学の鳥越教授もその教え子の一人である。先生はアメリカ人類学会の会員であるとともに，日本民俗学会の会員であり，同関西支部の評議員でもある。シカゴ大学の Ph. D. のテェマは "A Social History of the Rise of Amida Buddhism in Japan" であるが，1931年シカゴ大学出版部から出されており，インドや日本の仏教に関する研究が多い。たとえば，"History of the Study of Buddhism By the West" (Kwansei Gakuin Literary College Research Collection, 1932), "A Study of AVALOKITESVARA in India, China and Japan" (K. G. Hobungaku-bu Research Collection, 1936), "Social and Political Factors Influencing the Rise of Mahayana Buddhism" (Jimbun Ronkyn, Kwansei Gakuin University. Vol. X, No. 4. 1960) などがあり，現在さらに "Buddhism and Social Work in Japan" というテェマで大部のものをまとめられている。

学者としてのほかに，ミッショナリーとしての活躍もされている。すでに戦前，阪神地区においてフレンド社等の社会福祉活動に参加し，推進されていた。また南メソジチスト宣教師団社会福祉部主任，東京深川区のセットルメントの設立運動にも参加協力されていた。その他，東京愛恵学園理事，日本キリスト教国際奉仕団理事をされるなどミッショナリーとして，社会福祉事業に尽くされている。最近わが国で各地に「善意銀行」の企てがあるが，先生は関西でのその草分けをされた一人であることは，とくに記しておきたい。また近年学院が千刈に「農村センター」を設けたが，その中心人物として，自らそこに移り住んで親牛や仔牛の成長を楽しんでいられることは衆知のことである。

このように社会福祉事業の面で実践に活躍されているところから，その面での論述も多い。

スピノーザのエチカの第五部の最後のところに，「すべて高貴なものは稀であるとともに困難である」という言葉がある。先生はまさにそのような人柄であった。高貴な香りを絶えず私たちに与えて頂いている。高貴な「哲人」ともいうべき方である。その先生が来春退職されて，アメリカに帰られるのである。しかし先生の高貴な香りは海を隔てて，私たちのなかにいつまでも生き続けるであろう。学院，そして社会学部のなかに，このような高貴な方々の献身がいまも生きており，将来も生き続けるであろうことを忘れてはならない。

故国における先生ご夫婦と御家族の方々のご健康とご多幸を，社会学部の一隅から，切にお祈り申し上げている次第である。

(1965・12・13 社会学部研究室にて)